

特集にあたって

つながりのなかで広げる小児看護の技

— 看護師が織りなす看看連携 —

現在の医療現場では医療技術の向上と専門化・細分化に伴い、全人的に子どもをとらえることが難しい状況となってきました。大学病院などの総合病院では、在院日数の短縮や診療報酬の改定などもあって病院経営が年々厳しくなっているのは周知の事実です。そのため、ある程度診療にめどが立つと、自宅近くの総合病院やクリニックを紹介し、できるだけ地域と連携したシームレスな医療連携を心がけています。地域に密着しているクリニックや病院が総合病院などと連携し、子どもや家族が困ったときのかかりつけ医として「病診連携」という形を積極的にとっています。しかし、子ども・家族のなかにはなじみのある総合病院のほうが安心できる、それまで通っている病院のほうがわかってきているなどの理由で、なかなか近医での対応が難しい場合もあります。

小児医療は以前とは大きく変わり、診断技術も治療技術も大幅に向上しており、過去には助けられなかった疾患でも救命できる時代になってきています。成人期になっても引き続き小児期からの疾患とともに歩んでいかなければならない状況で、小児科から成人科への移行は簡単なことではないでしょう。長い人生において、子どもは地域

のなかで育ち、命を育みます。地域のなかで疾患とともにどう生活していくのかは、やはり地域にある病院とともにどう歩んでいかにヒントがあると思います。そのとき、もっとも近くにいるのが看護師です。医師には相談しにくいけれど、看護師になら言えそう、話しかけられそうという感覚は理解できるかと思います。

生活を視点とする看護師がどのように連携していくかで子ども・家族の生活への安心感が増すのではないかと考えています。「看看連携」という言葉が使われるようになり、実際には医療行為を在宅へもち帰る子ども・家族に対して、訪問看護というサービスでつながることはできるようになりましたが、その数は多くはないという現状です。在宅医療だけではなく、普段から子ども・家族とのかかわりのなかで子どもが安心できる環境を提供する支援の一つとして、子どもの苦痛や悩みにどう向き合うか、共に考えることができればと思います。

田村恵美 Tamura Megumi

埼玉県立小児医療センター看護師長/
小児看護専門看護師、移植コーディネーター